

# 史遊会通信

No.248号  
平成27年  
12月5日

編集  
042-754-9360  
arai-hiroshi@  
jcom.home.ne.jp  
新井宏

十一月講演・討論会の講演要旨

## 地政学・ポーランドと韓国

新井宏

歴史上には、時代や地域が異なっても良く似た現象がしばしば現れる。

例えば、イタリアのルネッサンス期のチェーザレ・ボルジアは、塩野七生が「優雅なる冷酷」と表現したように織田信長そっくりの男であるが、彼の妹、ルクレツァー・ボルジアもお市の方と同じく絶世の美人、相次いで政略結婚をさせられたところまで似ている。

そう思っているとミラノ公国のイル・モーロは武田信玄、傭兵隊長の反乱は明智光秀であるのか。このように対比してみると、なじみの薄いイタリア史でも何となく判ったよう

な気がする。これが外国の歴史を覚える極意だと思っている。

さて、今回のテーマは、討論会として歴史上の類似性についての事例などを紹介して頂こうという趣向であるが、その事例研究として、「地政学」におけるポーランドと韓国の類似性を論ずる。

最近の韓国の右往左往ぶりは、第一次大戦後、百二十五年ぶりにやっと祖国を回復したポーランドがその後、ナチスとソ連を天秤にかけて「均衡者外交」を進めたため、再び国が分割されてしまった歴史と重なる。

### 忘年会のお知らせ

日時 十二月九日(水)

午後五時三十分～八時

会場 コートダジュール銀座コリドー店

中央区銀座七の二の二二

地下鉄「銀座駅」三分

趣向 参加費無料 一時間半程度歓談

その後一時間程度カラオケ大会

一月号自由執筆 三戸岡道夫、中込勝則、

安田保之の諸氏 締切十二月末

### 総会のお知らせ

日時 一月十六日(土) 午後三時～五時

会場 銀座ルノアール八重洲北口会議室

講演 柴田弘武氏

テーマ 未定

絶対に手を握るはずのないナチスとソ連が秘密裏にポーランドの分割を決めたために第二次世界大戦は始まった。

その歴史に学ぶことなく、韓国は「均衡者外交」を気取って、中国に近づき、米国や日本を苛立たせている。

一、地政学的なポーランドと朝鮮半島

## ポーランドと朝鮮半島の対比



まず最初に、歴史的に見たポーランドと朝鮮半島の地政学的な類似点を紹介しよう。

(1) 七世紀の朝鮮半島と九世紀のポーランド

七世紀の朝鮮半島は、唐と新羅によって百済と高句麗が滅ぼされ、半島を新羅が統一し、高句麗の後続国家・渤海が出現した東アジアの大激動時代である。日本では大化改新を経て、倭国から日本国が成立した。一方、九世紀頃のポーランドとバルト諸国は、バルト海対岸にバイキング、西にはフランク王国、東にはルーシ(古ロシア) 11公国が控えていた。九世紀のヨーロッパの地図に、七世

紀の東アジアの国家を重ねると、現在のバルト三国は朝鮮半島(加耶、百濟、新羅)、ポーランドは高句麗、そしてフランク王国が中国(唐)、ルーシ(古ロシア)が北方民族(契丹、女真)によく対応している。その上、「バイキング」が日本の「倭寇」とそっくりである。その頃、バイキングはフランク王国のブルターニュ地方を占拠し、バルト三国・ポーランドに侵入し、古ロシアまで勢力を伸ばしていた。そもそもロシアの語源はルーシであるが、それはバイキングのことを意味する。

(2) 現代の朝鮮半島と中央ヨーロッパ

現在、地球上に、長期独裁国家として残っているのは、ポーランドの隣国ベラルーシと朝鮮半島の北朝鮮のみである。

地理的に見ると、北朝鮮の南に韓国、後方に中国があるように、ベラルーシの西にはポーランド、後方にはロシアがある。このような地域に長期独裁政権が残っているは偶然とばかりは言えないのである。

### 二、ポーランドと韓国の歴史

#### (1) ポーランドの歴史

ポーランドは十一世紀には、初期ポーランド王国を形成したが、十三世紀になると、残虐で知られる北方十字軍(ドイツ騎士団)とモンゴルの侵略により国土が荒廃し、モンゴ

ルが去ってからは、空白地にドイツ系移民と十字軍の迫害を逃れてユダヤ人も大勢やってきて、アウシュビッツの惨劇の当事者となってしまった。

しかし、十四世紀末に成立したポーランド・リトアニア連合は、ドイツ騎士団に対して優勢となり、一四一〇年のヨーロッパ中世史上最大の会戦、タンネンベルクの戦いで圧勝した。

その後、十六世紀にはポーランド・リトアニア共和国として、ベラルーシ、ウクライナを含めて、ヨーロッパの最強国に成長する。一六八三年のオスマン帝国十六万人の軍勢による第二次ウイーン包囲では、ポーランド国王ヤン三世が救援に駆けつけ、オスマン軍を敗走させている。

ただし、ポーランド国王は世襲制でなく、貴族達によって選挙される仕組みであったために、お互いに牽制しあい、外国系の王家からの干渉を招くことが多かった。

これに便乗したのが、ロシアの女帝エカチエリーナ二世とプロイセン王国のフリードリヒ二世、そしてハプスブルグである。これら三強国は、ポーランドを三分割し、最終的には一七九五年にポーランド王国を消滅させてしまう。

分割されたポーランドが復活するのは、百二十三年後の第一次世界大戦直後の一九一九年である。大戦中に、ロシア革命によってロマノフ王朝が斃れ、ドイツ帝国も崩壊し、ポーランドに権力の空白が生じたため、アメリカ大統領ウィルソンの提唱により独立を回復することになったのである。いわば、日本の敗戦により、朝鮮が独立を回復したのと状況は似ている。

復活したポーランドは、革命ロシアに対して戦端を開く。これを応援したのが仏や英で、戦況は一進一退であったが、一九二〇年末にはポーランドはベラルーシおよびウクライナの西部を得た。

この頃、ドイツは、巨額な賠償金に苦しみながらも、強国の意識を持ち続けていた。プロイセンはドイツ領でなければならぬ。

敗戦国ドイツは、一九二二年には早くも、伝統的な敵対国のロシア・ソビエトとラパロ条約を結んで、ベルサイユ体制に揺さぶりをかけ、その四年後の一九二六年には、国際連盟の常任理事国入りを果たしている。ドイツを無視してのヨーロッパはなかった。ドイツとソ連の接近は、挟み撃ちとされるポーランドを脅かす。

自ら独立を勝ち得た訳ではなかったポーランドがドイツに対して抱く敵愾心は、韓国民の日本に対する反日感情よりも強かったかも知れない。

その中で、ナチスのドイツが急激に勢力を拡大し、ソビエト連邦も旧ロシアにおとらずポーランドを狙ってくる。地政学的にポーランドは汎ゲルマンのドイツ勢力と共産主義ソビエト勢力の草刈り場であり、またもや、国の存立が脅かされはじめた。

屈曲したポーランドの感情は、徹底的にドイツ嫌いである。さりとて、体制の異なるソビエト連邦はもつと恐ろしい。経済力も付いてきた。さあどうするか。

そこに生まれた政策が「均衡者外交」である。イギリスやフランスを巻き込んで、ソ連とドイツの間の「均衡者」として、その発言権を高めようとの構想であった。

しかし、ポーランドはドイツと組むこともソ連と組むことも、その選択肢になり得なかった。唯一の道は、独立を与えてくれた英、仏、そして米としっかり組むことであったが、台頭するヒットラーへの防衛策として、まず一九三二年にソ連と不可侵条約を結び、ドイツと一九三四年に不可侵条約を結ぶ。そ

して、ドイツとの接近が「恐るべき幻想」であったことがまもなく判明する。

政治の世界では何が起ころかわからない。歴史的にも思想的にも、最も憎み合っていたナチスのドイツとソ連が突如として不可侵条約をむすぶのである。

かくして、一九三九年九月一日にドイツはポーランドへの侵攻を開始し、それに呼応して半月後には、東からソ連も攻め入り、一ヶ月余でポーランドを制圧し、再びポーランドは分割されてしまった。

## (2) 韓国

なぜ、このようにポーランドの分割問題を取り上げると言えば、それは韓国が同じ歩みをつづけているように見えるからである。

時に清国に付き、時に日本に付き、日清戦争後は、ロシアと日本をふらふらと行き来する行為は、強国に挟まれた小国の運命と言え、ばそれまでであるが、独立国を呈していなかった。しかし、そんな昔のことを言っているも仕方がない。

実は、近年になっても韓国は同じパターンを繰り返している。

二〇〇五年三月に盧武鉉大統領の掲げた「北東アジア均衡者論」すなわち「韓国が中心になり周囲の強大国と等距離外交を展開す

る」という構想である。これは明らかに、強国の間にあつて、韓国が政治を主導しようとする意図から出たもので、ポーランドの「均衡外交」と同質のものである。

この構想については、盧武鉉大統領の言動に支離滅裂なところがあつたので、米国も日本もまともに取り合わず無視したが、外交慣例から言えば、米国との同盟破棄宣言にも等しい内容であつた。韓国が世界を自ら泳ぐ行動をとる時、ろくな事はない。

面白いのは、その頃朴槿恵が、この構想を「外交的な孤立を招く」と批判していたことである。

さて、それでは最近の朴槿恵大統領の行動はどうであろうか。慰安婦問題で自縛自縛の朴槿恵は、中国に急接近している。中国語を学んでいて、個人的にも親中国観があるのかも知れないが、いわば朴槿恵の「均衡者外交」なのである。

しかし、外交専門家からは、米中間の等距離外交などという話は、国際政治への理解が足りないことから出た発想で、盧武鉉政権の「北東アジアの均衡者論」と同じく、大学院生レベルの理想主義的思考だと酷評されている。

国際政治の面では「均衡者」という言葉は、大国が強力な軍事力を背景に、国際紛争を調整・仲裁して平和と安定を確保する役割を指す国際政治の用語なのだそうである。

もちろん、輸出依存度の極めて高い韓国経済にあつて、中国は最大のお得意先であるから当然の面もある。それは中国が急成長する過程で、韓国の安価な中級技術を必要としたからであるが、今やその中国は中級技術の面では完全に韓国に追いつき、追い越し、競争相手に変貌しつつある。

韓国は見栄っ張りの国で、目に見える製品技術、上澄み技術には強いが、それを支える基礎技術は今でも日本に依存している。そのため、韓国から中国への輸出品には、日本の高度な技術部品や原材料が大量に含まれている。中国としては、今や韓国を排し、日本と直接組みたい状況になつている。そのため、韓国の得意な分野が中国に次々に侵食され、経済は落ち込む一方である。組むはずのないナチスとソ連が秘密裏に手を握つたように、経済面で韓国を抜きにして中国と日本が手を握るかも知れない。韓国の新聞が自嘲している。「中国市場が二倍に拡大しても韓国に分け前がない」と。それが「地政学」である。

### 三、第二のアチソンライン

朝鮮戦争は米国が一九五一年にアチソンラインを敷き、共産国との防衛ラインから韓国を外し、日本海まで後退させたために始まつた。米国の言うことを聞かない李承晩大統領に手を焼いた結果でもある。しかも李承晩は、北朝鮮よりも対馬侵攻をイメージして乏しい軍を釜山に集結させた。それを見て、北朝鮮は南進を開始したのである。

今や米国は第二のアチソンラインを敷いて、韓国を放り出しても、韓国がベトナムになるだけだと割り切っているかも知れない。特に共和党のトランプのように、韓国防衛ただ乗り論が米国民に大きな影響を与えている。もはや、韓国の中国傾斜は国際問題としてよりも米国の国内問題として重要なのである。

事実、共産国家であるベトナムは今や反中国の代表格であり、韓国がもし中国に近づいても、いずれ第二のベトナムとなり、中国と対立するに決まつている。その逆に、ナチスとソ連が秘密裏に手を握つたように、米国と中国が突然手を握つて韓国をいじめるかも知れない。

「均衡者外交」などという高級な手法は、韓国のように未熟な外交経験国では、怪我の元である。